★印は、単元内容に特に関連する問題です。

第9講座 古文(1)

■要点のまとめ■

(1) 歴史的かなづかいのきまり（現代かなづかいに直すときの注意）

① 原則として、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」となる。

・かは→かわ（川）　・あひだ→あいだ（間）

・あふ→あう（会う）　・うへ→うえ（上）　・かほ→かお（顔）

〈注　ただし、複合語の場合は除く。　あさ＋ひ→あさひ〉

② 「ぢ・づ・ゐ・ゑ」は、それぞれ「じ・ず・い・え」となる。

・いづれ→いずれ　・まゐる→まいる（参る）　・ゆゑ→ゆえ（故）

③ 「かふ（かう）・さふ（さう）・たふ（たう）」などは、それぞれ「こう・そう・とう」となる。

(2) 言葉の意味と形（古語）

① 現代語にはない言葉

・いと＝たいそう。

・いみじ＝非常に。

・つきづきし＝ふさわしい。　など

② 現代語と形が似ているが意味の異なる言葉

・あはれなり＝情趣（じょうしゅ）が深い。

・ありがたし＝めったにない。

・かなし＝いとしい。かわいい。

・ののしる＝騒（さわ）ぐ。

・やがて＝すぐに。

・をかし＝趣（おもむき）がある。　など

助詞

(1) 次の――線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

① 大事に扱う。（　　）

② 患者を診察（しんさつ）する。（　　）

③ 欠陥商品を回収する。（　　）

④ 雑誌に掲載される。（　　）

⑤ 事件の発端。（　　）

⑥ 水道の蛇口をひねる。（　　）

(2) 次の――線部の助詞の種類をあとから選びなさい。

① 父に聞けばわかるよ。（　　）

② 私も一緒（いっしょ）に行きます。（　　）

③ みんな教室に集まった。（　　）

④ だれにも言うな。（　　）

ア 格助詞　イ 接続助詞　ウ 副助詞　エ 終助詞

(3) 次の――線部の助詞の意味をあとから選びなさい。

① 「賛成です」と答える。（　　）　② 廊下（ろうか）は走るな。（　　）

③ 大雨で川が増水する。（　　）　④ 今年こそがんばろう。（　　）

ア 引用　イ 強調　ウ 理由　エ 禁止

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

いと寒きに、火など急ぎおこして炭もて渡るもいと①つきづきしと、清少納言の書かれたる、a げにさることにて、冬はただこれのみぞ、②客人のもてなしにもなりぬべき。雪のb おもしろうふりつもりたる日、かねてちぎりし人を訪ふに、③思ひしごとく、表座敷きよくはらひて、すだれ高くまきあげたるいとをかし。大きなる火桶の、よきほどに埋める火に、やがてさしむかひたる心地、c いみじううれしく、④あるじの深き心も思ひ知られぬ。今もうち散るを見つつ、⑤物語などするほどに、なほつがんとて取り出でたる炭を、手づからつぐもをかしく、雪の寒さも忘れらる。

（中島広足『檜園文集』）

★**問一** 〰線㋐「をかし」、㋑「さしむかひたる」、㋒「なほ」を現代かなづかいに直して書きなさい。

㋐（　　）　㋑（　　）

㋒（　　）

★**問二** ═線a「げに」、b「おもしろう」、c「いみじう」の意味として最も適当なものをそれぞれのア～エから選び、記号で答えなさい。

a　ア 意外にも。　イ 突然に。　ウ 本当に。　エ 変に。（　　）

b　ア たくさん。　イ 不思議な様子で。　ウ 静かに。　エ 趣深く。（　　）

c　ア 非常に。　イ いつも。　ウ 少しばかり。　エ いつまでも。（　　）

★**問三** ──線①「つきづきし」とありますが、どんな様子が「つきづきし」というのですか。現代語で書きなさい。

（　　）

問四 ──線②「客人のもてなしにもなりぬべき」とありますが、何が「客人のもてなし」になるのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 雪　イ 表座敷き　ウ 炭火　エ 書物（　　）

問五 ──線③「思ひしごとく」とありますが、だれが思ったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 客人　イ 清少納言　ウ あるじ　エ 筆者（　　）

問六 ──線④「あるじの深き心」とありますが、どのような心ですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 客をせいいっぱいもてなそうとする心。
イ 雪見をせいいっぱい楽しみたいと思う心。
ウ 雪の寒さに耐えて春を待ち続ける心。
エ 昔の風流人のまねをしようとする心。（　　）

問七 ──線⑤「見つつ」とありますが、何のどのような様子を見ているのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア すだれからしずくが落ちる様子。
イ 火桶の灰がふわっと舞い散る様子。
ウ 炭の火がぱちぱちとはじける様子。
エ 雪がちらちら降る様子。（　　）

練習問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある時、夜更けて、樋口屋の門をたたきて、酢を買ひに来る人あり。*1中戸を、奥へはかすかに聞えける。下男目を覚まし、「*2何程がの。」といふ。「*3むつかしながら、*4一文がの。」といふ。空寝入りして、その後返事もせねば、①是非なく帰りぬ。夜明けて、*5亭主はかの男呼びつけて、何の用もなきに、「門口三尺掘れ。」といふ。御意に任せ、諸肌脱ぎて鍬を取り、堅地に気を尽し、身汗水なして、②やうやう掘りける。その深さ三尺といふ時、「銭が有るはず、いまだ出ぬか。」といふ。「小石、貝殻より外に、何も見えませぬ。」と申す。「それ程にしても、銭が一文ない事、よく心得て、*7重ねては一文商ひも大事にすべし。」

（井原西鶴『日本永代蔵』）

＊1中戸＝店と奥とを仕切る戸を隔てて。
＊2何程がの＝どれほどですか。
＊3むつかしながら＝ごめんどうですが。
＊4文＝昔の貨幣の単位。一文は少額。　＊5亭主＝店の主人。
＊6三尺＝約一メートル。　＊7重ねては＝これからは。

★**問一**　――線①「是非なく帰りぬ」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　仕方なく帰った。　イ　どうしても帰らない。
ウ　喜んで帰った。　エ　怒って帰らない。

〔　　〕

★**問二**　――線②「やうやう」を現代かなづかいに直して書きなさい。

〔　　〕

問三　本文の内容を次のようにまとめました。［　　］Ⅰ～Ⅴにあてはまる言葉を文中から探し、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳは二字、Ⅱ・Ⅴは四字でそれぞれ書き抜きなさい。

ある夜更け　樋口屋に酢を買いに来る人がいた。
客（酢を買ひに来る人）…「むつかしながら、一文がの。」
＝一文分の酢を求める。
下男…「空寝入りして、その後返事もせねば」
＝夜更けに、たった［Ⅰ］の商売のために店を開けるのはめんどうだったので、［Ⅱ］をして、客があきらめて帰るように仕向ける。
客（酢を買ひに来る人）…「是非なく帰りぬ」
翌日　夜が明けて、［Ⅲ］が下男を呼びつける。
［Ⅲ］…「銭が有るはず」と言って、地面を［Ⅳ］の深さまで掘らせる。
下男…一心に汗水たらして地面を掘っても、一文も出てこない。
［Ⅲ］…それほど苦労しても銭が一文もないことを心得て、これからは「［Ⅴ］」も大切にするようにと、下男をさとす。

Ⅰ［　　］　Ⅱ［　　］　Ⅲ［　　］　Ⅳ［　　］　Ⅴ［　　］

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

藤次郎といふ者、外に出でしとき、犬の子の、はなはだ愛らしきを見て、①もらひて帰り、家に飼ふ。この犬、その親犬の居所に、夜ごとに行きてそのかたはらに伏す。魚肉など得たるときは、口にふくみて持ち行き、親犬に与ふ。その道のほど、およそ三町あまりなり。藤次郎、大いに驚き感じけるが、たはぶれに犬を叱りて、「人の家に犬を飼ふことは夜を守らしめんためなり。しかるに汝、わが家に養はれながら、夜ごとに外にありて、②おのれが職をつとめざるこそ不忠なれ」と言ひけるに、その夜より、隔夜に、主人の家と親の飼はれし家に③伏しけり。

（中村新斎『思斉漫録』）

＊1町＝距離の単位。一町は約一〇九メートル。　＊2汝＝おまえ。

★問一 ——線①「もらひて」を現代かなづかいに直して書きなさい。

〔　　〕

問二 ——線②「おのれが職」とありますが、「職」の内容を現代語で十五字以内で書きなさい。

問三 ——線③「伏しけり」の動作主を次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 子犬　　**イ** 親犬

ウ 子犬と親犬　　**エ** 藤次郎

〔　　〕

問四 本文の内容について、Aさんたち三人は次のような話し合いをしました。［　　］Ⅰ・Ⅱにあてはまる言葉として最も適当なものをあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

Aさん　この文章は、藤次郎が子犬をもらってきたところから始まるね。

Bさん　子犬は藤次郎に飼われているのに、夜になると親犬のところへ行っているね。魚肉などを得たときは親犬に持って行っていることから、子犬は［Ⅰ］で行動しているという印象を受けるね。

Cさん　そのことを知った藤次郎も「驚き感じける」、つまり、驚いて感心しているね。その後に、藤次郎は子犬を、「夜ごとに外」に出るのは「おのれが職」を果たさず「不忠」だと冗談めかして叱っているよ。

Aさん　すると子犬は、その夜から藤次郎の家と親犬のところに交互に泊まるようになったんだね。

Bさん　そうすると、この文章は［Ⅱ］と要約できそうだね。

Ⅰ　**ア** 藤次郎への反抗心　　**イ** 親犬への反抗心

ウ 藤次郎を思いやる心　　**エ** 親犬を思いやる心

〔　　〕

Ⅱ　**ア** 藤次郎が、自分になつかない子犬の心をつかみたいと思い、ごちそうを食べさせて手なずけようとした話

イ 子犬が、親犬を忘れることができずいつも親犬のために食べ物を運び、親犬といっしょに寝た話

ウ 子犬が、藤次郎の言葉を理解したのか親犬に対する気持ちだけでなく、飼い主への誠意も示すようになった話

エ 藤次郎が望んだとおり、子犬が親犬よりも飼い主を大切にするようになったので、藤次郎が喜んだという話

〔　　〕